

芥川だより

発行日 * 2023年1月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

狂気の軍備増強



何が何やら分からぬままに戦争準備の法案が用意されだした。国民に信を問うための選挙もやるという。これまでの戦争反対の声はかき消され一気に戦争ムードに突入とはあきれ果ててしまう。憲法9条の改正も時間の問題か。

ロシアによるウクライナ侵攻によって世界の常識が壊され、やったもん勝ちの恐ろしい時代に戻ってしまったのか。そんなことはない、一時的な事件だ、ロシア国民もいつまでもプーチンの暴挙を許しはしない。和平への動きが出てくるはずだ。

北朝鮮のミサイルや中国の軍備増強を逆手にとって日本も軍備増強に邁進すると舵をきったのは何故か。攻撃の抑止力を強くするには軍備増強しかないという単純な理屈だ。

確かに挑発的と思える中国や北朝鮮の軍事行動もニュースで伝えられるから、ますます急を要する問題になって、今やその財源をどうするかと論点が飛躍してしまっている有様だ。

ミサイルなども使用期限があるはずだ。一定の期間で廃棄処分にし新しいのに更新しなければ使い物にならない。この使用期限のたびに世界の各地で戦争が起こると考えるのは妄想だろうか。兵器は作りつづけなければならない宿命がある。一度増強したら減らすのは難しい。軍事費の負担に耐えきれずに国が衰退し滅ぶのが過去の歴史ではないか。軍備の拡大で一時的には領土を拡大しても必ず国は外敵でなく国内の内乱によって分裂し滅ぶ。

日本の選択は明快である。軍備増強をしない事である。周辺国が軍備の増強をしても、今以上に軍事費を増加させず、国民の負担を増やさない事こそ国を守る政府の役目だ。歴代の自民党政権がやってきたようにアメリカの政治的な圧力があっても憲法9条や戦争反対の世論を盾にのらりくらりと圧力をかわし時間を稼ぎ世界の状況が変わっていくのを待つのが賢明な政治である。アメリカは選挙によって大きく政治が変わり外交政策も変化する。

なにがなんでも早急な軍備増強は絶対にしてはいけない。ほんとうに日本を守ろうとするならば、これ以上の軍事大国の道を選択してはいけない。もうすでに日本は軍事大国なのだから。

死をめぐるあれやこれ(98)

石川 吾郎

古代のイメージトレーニング

正月の恒例、漢詩のご紹介をしよう。

陶淵明「擬挽歌詩」より。

有生必有死 早終非命促

うまれたからには 遅かれ早かれあの世いき

昨暮同爲人 今且在鬼錄

夕べはまだ人だったが 今朝になると鬼のなかま

魂氣散何之 枯形寄空木

魂はどこいった 枯れたむくろが寝るばかり

嬌兒索父啼 良友撫我哭

子は父よと泣き 良友は私を撫でて嘆く

得失不復知 是非安能覺

生きてきたのがよかったか 皆目わからぬ

千秋萬歳後 誰知榮與辱

千年万年たったら だれがだれだか

但恨在世時 飲酒不得足

ただただこの世で 飲み足りぬのが心残り

これは四〇五世紀の中国の詩人、陶淵明の作。この詩は死者を悼む挽歌を、とくに自分の死をめぐる作つたもの。しかも納棺の場面なのだ。ここで詩人は自分の死のイメージトレーニングを実行している。

魂が自分の体から抜け出て、部屋の斜め上の空間から冷静に人々の反応を見ていような風情がある。これは最近の臨死体験の知見とも相通じるようだ。最後の句は、この人らしくほほえましくはあるが・・・。

このようなイメージトレーニングは、我々にも必要なかもしれない。

芥川だより一九二号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 97	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 106	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 56	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 62	下村嘉明	5
新型コロナウイルス愚考	明石幸次郎	6
その 28		
オクラの山たより 76	因了生	7
隠された歴史 51	満田正賢	9
道を行く 三五	成瀬和之	12
プロバガンダに騙されるな		
学び直そう戦争と憲法の歴史	成瀬和之	13
(十)		
俳句	土田裕	14
	影山武司	
編集後記	S K生	15
ふみの道草 55	山椒魚	16

素老人☆よもだ帳 (106)

坂本一光

◆武器、基地捨てよ日本よ

明治三十七年(一九〇四年)、日露戦争の最中に歌人の与謝野晶子は「君死にたまふことなかれ」と詩を詠んだ。

君死にたまふことなかれ

(旅順口攻囲軍の中に在る弟を歎きて)

与謝野晶子

あゝをとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ。
末(すゑ)に生れし君なれば
親のなさはまさりしも、
親は双(やいば)をにぎらせて
人を殺せと教へしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや。
堺(さかい)の街のあきびとの
旧家(しにせ)を誇るあるじにて、
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ。
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとも、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。
君死にたまふことなかれ。
すめらみことは、戦ひに

おほみづからは出いでまさぬ、
かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこゝろの深ければ、
もとよりいかで思(おぼ)されむ。

あゝをとうとよ、戦ひに
君死にたまふことなかれ。
過ぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきのなかに、いたましく、
わが子を召され、家を守(もり)、
安しと聞ける大御代(おほみよ)も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾(のれん)のかげに伏して泣く
あえかに若き新妻(にひづま)を
君わするるや、思へるや、
十月(とつき)も添はで別れたる
少女(をとめ)ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
あまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ。

この詩が単純に「反戦詩」と言えるかどうかについては、晶子のその後の詩作などから疑問とする見方があるが、今はそれは措く。政府は昨年十二月十六日、「国家安全保障戦略」「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」のいわゆる安保3文書を閣議決定した。「反撃能力」と称する「敵

長距離巡航ミサイル・トマホークなど大量のミサイル配備計画も明記。来年度から五年間の軍事費は総額約四十三兆円で、過去五年間の1・5倍を超える異常な増額。安倍内閣のもとで強行された「集団的自衛権行使容認」に続き、今回は国会の議論や国民的議論もなまに、「専守防衛」という戦後安保政策の根幹を放棄する歴史的転換を決定した。

そんな時に、歌人あるいは詩人ならぬ九十一歳の書道家・石田美智子氏が「あ日本よ君を啼く」と詠ったことを知った。

石田美智子

武器、基地捨てよ日本よ
ああ日本よ君を啼く
君、戦うことなかれ
まだ百年も経たぬのに
火が降り、若きが散りたるを。
広島に生(あ)れし大臣(おとど)なれば、
一瞬に死すその影や、
放射能に病む人を、
よも知らぬとは思われぬ。
「敵基地攻撃能力不可欠」と今朝のニュースに見出して、朝のこころは晴れやらぬ。
日本原発列島に、
生くる者なき幻を。

壊るる地球その上に、
生きる人間の勝手にて
永き未来の豊かさを

戦火に焼(く)べてよいものか。

ことばを持てる人なれば
ことばの力活かすべし。

ああ、日本よ、君を啼く

ウクライナでの戦争を見て、侵略する
気にならない巨大な軍事力をもたなければ
国の安全は守れないと政府は言う。し
かし、軍事力こそが戦争を抑止すると一
方の国が考えれば、同じことを他方の国
もまた考えるしかない。それでは、一触
即発の軍拡競争が止めどなく進むだけだ
ある。

「ことばを持てる人なれば、ことばの
力活かすべし」と書道家は言う。言葉を
無力化してきた政治家の政府には、言葉
を活かす外交能力は失せてしまっている
ようだ。小学校六年生の時に六十年日米
安保条約改定反対闘争の遠い騒ぎを聞いて
以来、耳にタコができるほど聞かされて
きた「日米安保条約があるから日本は
安全」だという『神話』はどこに行った
のかと、素老人などは実に単純に思っ
てしまう。まさしく、

抑止力アンポに無いとよくわかり
である。湯水のように外国の軍事基地に
税金を投入し続け、まだ抑止力が足りない
のは「安全保障をめぐる国際環境の劇
的な変化」のためだと言うのは、長年に

わたる政府の無能を柵に上げた詐欺のよ
うにさえ見えるというほかない。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(56)

祖蔵 哲

2023年 時事哲学語りはじめ

早くも2023年に年が改まった。も
う一年前のことになったが、22年2月、
衝撃的なロシアによるウクライナ侵略戦
争が開始された。だがそれは今だ終焉の
目途さえ立っていない。過去の幾多の戦
争において正月休戦などは特別に申し合
わされたが、この戦争では一切そういう
ことが行われなかった。首都キウウは元
日にロシアによる無人機の爆撃を受けた。
誠に残念なことだがこの戦争には仲裁国
が存在しない。なぜなら軍事力で劣勢で
あるウクライナ自身が戦争の継続を望ん
でいるからである。そしてその背後には
アメリカがいる。もちろんいわゆる西側
はそれを支えている。一方のロシアには
反アメリカ諸国がついている。過去の冷
戦構造は資本主義と社会主義の思想経済

的対立構造であったが、現在の対立構造
は世界の覇権をめぐる単なる経済的利害
をめぐる抗争に陥っている。思想なき戦
いには終わりはない。なぜなら人間的理
性が関与しない争いは動物の本能と同じ
だからである。

さて、年初の放談は恒例により今年の
政治経済スケジュールからはじめよう。

(1) 23年1月「ダボス会議」〜賢

人とは

今月1月には世界経済フォーラムいわ
ゆるダボス会議が開催される。この会議
は1971年ドイツの経済学者であるク
ラウス・シュワブ教授が社会に責任を負
う「ステークホルダー(利害関係者)理
論」の構想をもとに創設したことによる。
各国から様々なリーダーが集まり、より
よい社会のための議論が行われる。その
テーマは、環境問題、経済、技術、雇用、
健康、国際協力、社会平等など。毎年1
月に開催されるが近年はコロナなどによ
り変則的になっていった。

今年のテーマは新型コロナウイルス禍
からの経済再成長、エネルギー転換、グ
ローバル化の行方が主な議題になるらし
い。欧州で進むエネルギーの「脱ロシア」
をめぐる争いは、安全保障・脱炭素の両面
から「災いが転じて福となりうる」とウ
クライナ戦争がビジネスにとっては好機
と見られている。また、噂ではウクライ
ナのゼレンスキー大統領が対面で参加さ

れることが予想されている。内容はどう
も「戦後復興構想」になる見込み。まだ
戦争は終わっていないし、戦死者は増加
の一方だ。それらと同時に戦後処理の金
銭相談。どうも通常感覚ではついてい
けない次元に世界は入っているようだ。
ダボス会議は別名、世界賢人会議とも
呼ばれている。それは立場が異なる人々
が知恵を出し合い討議して人類にとって
最適な答えを導き出すことから名づけら
れていた。その会議が前回からロシアの
代表を招待しなくなった。これが真の賢
人のすることなのか。人間の知恵が試さ
れている。

(2) 4月…日銀総裁任期満了〜責任

者の不在

アベノミクスの擁護人、日銀の黒田総
裁がその任期、二期十年を終える。アベ
ノミクスの看板政策「異次元の金融緩和」
を主導した。この金融政策は、本質的に
は人工的円安政策である。2%という物
価上昇率の目標を掲げ、それを達成する
手段が円安だった。金融緩和で市場に大
量のお金を供給することで円安・株高を
起こし、物価上昇をつくりだそうとした。
当初、物価上昇率は1.5%程度まで上が
った。そこで賃金も上がれば、ひよつと
するとうまくいくこともあると思った。
しかし、労働側が弱体化した昨今の春闘
では賃金が大きく上がらなかった。そこ
で政府が民間企業の賃上げを促す『官製

春闘』を始めた。日本は資本主義国である。資本主義経済は自由意志に基づく市場経済で成り立っている。それを操るのは「神の見えざる手」のほずである。しかし、現実には官製統制経済であった。一般国民を犠牲にして日本国を安く売る「円安誘導」により金持ち優遇の株高を演出して経済市場を作り出していた。しかし、いよいよアベノミクスの化けの皮が剥がれかかってきている。昨今の原油価格の上昇のより本物の物価上昇が動き出したからである。昨年の後半には、円安の影響のほうが大きくなった。つまり、円安は、勤労者の生活にとって望ましくないことであることが明確にわかったのである。物価上昇はいずれ収まるかもしれないが、物価水準はもとに戻るとは限らない。もとに戻らなければ、預金などの資産の実質価値は低下する。つまり、労働者の賃金、資産は実質減少するのである。少し前まで、円安は輸出国日本にとって良いことであるという認識があったが、今や円安は悪いことだと国民が思い直したのである。

アベノミクスの張本人はもういない。「責任」とは応答することである。死者は返答できない。置いてゆかれたのは罪のない一般国民である。

(3) 5月：G7広島サミット「核の傘」からシエアリングへ

G7サミット(主要国首脳会議)とは、

自由、民主主義、人権などの基本的価値を共有する米国、英国、フランス、ドイツ、イタリア、カナダ、日本の「か国」と欧州連合(EU)が一つのテーブルを囲みながら、世界経済、地域情勢、様々な地球規模課題について、率直な意見交換をする場であるという。

1975年、世界的なオイルショックによる危機をきっかけに会合は始まった。その後

1998年から2013年まで、構成メンバーにロシアが加わりG8となったが、2014年のクリミア侵攻によってロシア大統領が参加資格停止となり、それ以降はG7に戻って今日に至っている。このような一部の国が世界全体の秩序を決めるという覇権主義的な会合には、いわゆる第三国からの批判も多い。

アジアの秩序を代表するということで日本がメンバーに加わっているが、今年の開催国は日本であり議長国として7回目である。場所は広島が選ばれた。その理由は、ウクライナ情勢が緊迫化するなか、核兵器使用のリスクへの懸念の高まりとともに、人類存続の危機に陥りかねないという不安が世界中に広がっているためだとされる。

残念ながらこの会議では核の問題は「議論されないだろう。議論ではなく、すでに独善的に決められた体制を維持拡大するのがその目的と考えられる。日本は言うまでもなく世界初の核被ばく国で

ある。そのために核廃絶については当然世界の先頭を走ることが義務となっているはずであるが、米国の「核の傘」のもとにあるためか核兵器の抑止効果を認めさせられている。しかし、近年この「核の傘」構想も拡大解釈される傾向にある。特に前安部首相は「核共有」をタブー視せずに議論すべきとさらに一線を越える発言をした。

核共有(核シエアリング)とは、NATOの核抑止政策における概念で、NATOによる核兵器使用のために、自国の核兵器を持たない加盟国が計画的に關与することである。特に、核兵器が使用される場合、その国の軍隊が核兵器の運搬に關与することを定めている。現在のウクライナ戦争において、プーチン大統領による核恫喝言動に怯えた日本で、「アメリカとの核シエアリングをタブー視せず」に議論をすべきである」といった主張が湧き上がっている。タブーとは無論「非核三原則」のことである。アメリカにとっては欧州危機から日本への流れは「一石二鳥」。戦争により得をする国はどこか。これが戦争の原因でもある。

ちなみにシエアリングと似ているような言葉にレンタルがある。どのように異なるのであろうか。シエアリングは特定のものを会員間で共有し、それぞれが利用したい時間に借りることができるサービスであるが、レンタルは単純に有料で借りるサービス。つまり、シエアリング

は「会員資格」が必要となる。その多くは会費であろう。つまり、核シエアリングは共同で核兵器を保有するのと同じことである。今までは日本はアメリカの傘を借りていたが、これからは傘を所有するということ。いよいよ核保有国となるのである。

(4) 9月：関東大震災から一〇〇年へ
天災が人災になる

「天災は忘れた頃にやってくる。」とは寺田寅彦の言葉である。彼は第五高等学校(熊本大学)で夏目漱石に英語を習い、「夏目漱石の一番弟子」と呼ばれることもある物理学者である。防災学者でもあった彼は1923年9月1日に発生した関東大震災を忘れないためにこの言葉を残した。今から一〇〇年前のことである。しかし、今や地球温暖化による異常気象の影響か、災害は日常のことになっている。そのせいでわたしたちは日々の備えに狼狽えて、肝心な根本的災害対策を忘れていく。

関東大震災後には大阪遷都が検討されていたらしい。しかし、当時の大正天皇が反対詔書を出している。惜しい機会を逃したものだ。明治維新によって天皇家は政権に利用されて無理やり東京に拉致されていたのに。京都戻り平和に暮らす絶好のチャンスだった。さてその後は全面的な首都の移転ではなく、政府の立法機関・行政機関・司法機関を他の都市に

移す首都機能移転構想が検討された。以後、議論は沈静化し大戦後再検討されたが、本格的に考えるようになったのがバブル景気により東京の土地価格が高騰した1990年。それを機に「国会等の移転に関する法律」が成立した。しかし、バブルが沈静化すると逆にこの政策による土地価格下落の方に懸念が移り議論は不活発になる。しかし、2011年東日本大震災が発生すると、東京都内でも「帰宅困難者」の発生や計画停電の影響から交通を初めとした首都機能が麻痺し、その影響で被災地支援に影響をきたすといった事態が発生した。そのため東京一極集中の弊害が再認識され、首都機能移転構想や遷都論までもが再浮上してきた。

これ以後、この構想は政治的主導権を争う道具になり、「副都心構想」や「道州制度」などという我田引水の議論に成り下がってしまっている。そして中央省庁の地方移転でも消費者庁の徳島県移転が見送られ、全面移転が実現するはずの京都府へ移る文化庁も一部だけで、大幅に遅れている。

今や自然災害も戦争と同じように政治経済の利権争いの具になっている。まさにそれは「人災」である。

くさて、こうして眺めると今年のテーマは「賢人」「責任」「人災」という「人間は何を為すべきか」ということが問われている年であるように思う。自然現象は

人間の意志とかわりなく「自ずから然り」と移り行く。しかし、人間はそれのように受け入れるか「何をすべきか」を考えなくてはならない。そして「何をすべきか」は、「手段」として善いものではなく、「目的」として善いものでなくてはならない。昨今はどうもこの「手段」として自己に都合の善いものだけが追求されているような気がする。

大峯奥駈道(62)

下村 嘉明

体験型人間学 12

「冬の36番ゲート」

六甲おろしが猛威を振るい風速10メートル、気温は零下であられが道を這うように飛び去って行く。西宮の最南端・鳴尾浜にある埠頭である。ときたま中国船が廃材のアルミを運び出す為に寄港する。巨大なアルミの集積場が埠頭に横たわっている。

前の台風の際に大潮が堤防を越え大きな被害をもたらしたので県が大潮にも耐えうるように更に高く護岸工事をしている。その一つの現場が36番ゲートの左

右に連なる堤防だ。

大型トラックが行きかうゲートで作業関係車両との接触を防ぐための交通誘導をするために警備員が配置されている。その役が私であった。

2ヶ月ばかり通っていたある日、見かけぬ警備員が私が入立っている所から少しばかり離れた小さな小屋と言っても座るだけのボックスにやって来た。一緒に来た上司と思える人が私に近づいてきて「〇〇警備の者ですが、よろしく」と挨拶して帰った後、警備服を着た老人が来て挨拶し少しばかり話をした。

中国船が明日入ってくるので4日ばかりここでアルミを積んだトラックをチェックする仕事だという。なんでも昔、この船が寄稿していた時に、船員が夜中に船を抜け出して町に出かけどこかで調達した自転車を持ってきたので、県の担当者にはゲートに監視員として警備員を24時間置くようになったらしい。それで県は、警備小屋とトイレを設置した。

これまでは、ただ見てるだけだったが、今回からは出入りする車のチェックという仕事を考えてくれたのだという。県というより税関職員が考えたのだろう。埠頭はおもしろいエリアだ。日本人でさえ許可なく入ることは出来ない。船の寄港時には、神戸税関の職員が二人、車を埠頭に駐車して監視する。私のところに来て質問を受けたこともある。税関職員は外務省の職員である。感じとしては警察

官に似ている。

話がそれだが、髪の毛はぼうぼうで顔はしわだらけ小柄な老人は相当老けて見えたので、「警備の仕事は何年位されてます？」と聞くと、老人は得意げにしゃべりだした。「わしは、27から今までずっと警備の仕事をしてきた。警備会社はいくつか代わったが、ほとんどの現場を見てきた。」一番よかった時代はいつでした。「そりゃ、万博の時で夜勤なら2万5千円ぐらいにかな、作業員の職人は三万円に70万ぐらいにはなった。当時は尼崎競艇の近くに住んでいたんで、休みの日は朝からボートに行った。いつまでも続くと思っていたので、すっかりボートレースで使ってしまった。出は四国だが永く帰っていない。親戚の者が家の世話をしているはずだ。そして、わしは70歳になったという。私より若いではないか、ひどく老けて見えるわけが分かった。漁師でも百姓の婆さんでも年齢以上に老けて見えるのは、海や畑で一日中、風や太陽の外気に触れているからにちがいない。特に寒さと風の強い地での作業は顔をしわだらけにし、強い紫外線は肌を黒く日焼けさせる。私が、ヒマラヤの奥地で見た女性たちも年齢以上に老けて見えたことを思いだした。私も一年余りの仕事で少しばかり顔が黒ずんできたが、外で働くというのは、そういう事なんだとしみじみと思った。

新型コロナウイルス禍愚考

(その28)

明石 幸次郎

新型コロナウイルス感染者が中国武漢で発生したと報道されたのが二〇一九年12月1日でした。それからまる3年が経ちましたが、その間にウイルスが変異を繰り返し、昨年の8月が第7波（ピークの感染者22万人）と言われ、それから山と谷を繰り返して、12月20日で十八万人程となり、第7波までには至ってませんが第8波と言われ、亡くなった人の数が12月22日、24日339人と第7波のピーク近くになっています。

感染を恐れて繁華街への外出、宴会なども控えていたが、自粛規制の緩和とウイルスに対する恐れが薄れ？たのか、繁華街、デパートの食料品売り場の混雑ぶりを見ているとコロナ感染以前に人出は戻っているように感じます。

新年はコロナウイルス感染禍4年目に入りますが、行動制限の緩和で感染状況が不明の中国からも春節時に数多くの中国人観光客が押し寄せてくるかも知れません、感染の拡大が懸念されます。

思い返せば3年前の12月20日に知り合いと6人で、難波道頓堀の近くで忘年会を夕方からやりましたが心斎橋筋は中国人観光客で溢れて、前に進むのも難儀しました。ニュースでは武漢で新型コ

ロナウイルスが発生して死者が出たと報道されてきましたが、その時は日本全体が対岸の火事と言うかボヤ騒ぎみたいな感じでした。

新しい年は海外から又、新種のコロナウイルスを持ち込まれないように、水際対策の検疫をしっかりとやってもらいたいものです。

さて、昨年最後の年末の電話ポランテイアで、掛け手の悩み、苦しみを聴くことで、掛け手も何か生きて行くのもエエかなあと思ってもらったという数少ないケースがありました。

それは、63歳の女性からの電話でした。「年の暮れになったが何も良いことがないので死にたい」と話が始まり「どうされましたか？何かしんどいことがあったんですか？」と応じたら「あのー、生活保護も審査で通らず、住む所もないから、施設に入れられたら、そこで人間関係がややこしくなり、ここを出ていきたくいけど行くところがない。こんなことであれば、コンビニで知り合った83歳のホームレス歴20年？のおばあさんについて行き、ホームレスの生き方を学んでた方が良かったかと後悔している」「そうですか？だけど、この寒い中、外で寝るのは大変ですよ」「しかし、このおばあさんはホームレスほど自由な生き方は無いよ！人に邪魔されることは無いからね！と言っていた。お金も無いし、もう人に悩まされ気分を悪くするくらいだっ

たら、このおばあさんのようにホームレスになるか、私のような人間が生きてても世の中に何も役に立ってない人間は死ぬしかないですよ！しかも年末になったら毎年思うんです。私、師走の忙しい12月30日に生まれたので、生まれてから誰にも祝福されたことがないんです。親からこんな忙しい年末に生まれてと年末の誕生日になると言われてきました。不幸な生まれなんです！本当に生まれて来なかつたら良かったと思うんです」「忙しい時に生まれてきたと言っても、貴女に責任は無いし、選ぶことも出来ないしね。私のお袋も誕生日が貴女と同じで、よく30日が来たら誕生日を祝ってもらったことがないと私ら子供に言っていましたね」「へえー。私と同じ誕生日ですか！そうですか。同じことを言われてた！何か縁があるんや」「そうですよ。しかも、私の事ですが、お袋の誕生日に兄貴がクモ膜下出血で倒れ、正月2日に亡くなりました。もう52年も前ですがね。本当に可哀そうでしたね」「そうですか？お母さんも大変でしたね。私も不幸ですが、娘が生きてますからね。40歳ですが、80万円も貯めているんですよ！私よりしっかりとるんですよ！」と落ち込んだ声が段々と元気な声になってきました。分かるんですね、掛け手の心の動きが。私（掛け手）も不幸だけど、同じように不幸な、しかも同じ誕生日の人（私の母親）が——と、何か自分の不幸が

相対化されて、不幸な人は自分だけではないと思ひ、ちよつと気持ちが楽になるのですかね。「あの、どうしたら、幸せになれるんですか？」と問われたので「んーそうですね。ちつちやな幸せと感ずることを自分で探すことですかね？自分でね！」と言つと「うん、例えばコンビニの100円のコーヒーとパンを食べて、おいしいなあと感じる事ですか？」「そうですよ。私もコンビニのコーヒーとドーナツを220円出して食べた時、ああ、おいしいなあ幸せやと思いますね。それと、幸せは他人が持つて来てくれませんか。よね。自分で探す、これは言えますね」「そうですか！自分でね。良いことを聞きました。有難うございました！頑張つて下さいね」とで終わりました。色々30分程話をして、人として同じ目線で話が出来て、「コンビニのコーヒーとパンでほつとした小さな幸せを感じる時間を持つ」それも掛け手から言われたことが、この人も何かを支えにして生きて行ける人だと安心して電話を終えました。

この様な電話の会話があるから頑張つてやろうと思つモチベーションになります。今年も良き隣人を目指し頑張つてやつていこうかと思つてます。

オクラの山たより (76)

困子生

一

「一茶俳句集」をパラパラと読んでみると気づくことは年齢を詠み込んだ句が多いことです。たとえば次の九句。

- ① 春立つや四十三年人の飯
- ② 春立つや菰(こも)もかぶらず
五十年
- ③ 五十にして冬籠もりさへならぬ也
- ④ 五十聳(むこ)天窓(あたま)を
かくす扇かな
- ⑤ 明月や五十七年旅の秋
- ⑥ 六十の坂越ゆるぞやつこらさ
- ⑦ 六十に二ツ踏み込む夜寒かな
- ⑧ さてもさても六十顔の出代わりよ
〔「出代わり」とは一年または半年契約の奉公人が雇用期限を終えて入れ替わることです〕
- ⑨ 六十年踊る夜もなく過(こ)しけり

ざっと見ただけでこれだけ出てくるわけですから一茶が自分の年齢に対する思いの深さはたいそうなものと見ることもできるのですが、一茶研究の人たちの感想は少しばかり違います。岩波文庫の「一茶俳句集」を校注した丸山一彦氏は「一茶には年齢を詠みこんだ句が多く、中には数字的効果だけを狙った、でたらめなもの

も見かける」といった評をし、俳人川島つゆ氏は「年齢を気にするあまり年齢のでたらめ(な句)が多い」という評をしています。ただ、丸山、川島の両氏とも「これ(⑨の句)は真正銘六十歳の吟」としています。まさしく六十歳の句ですので、ケレン味なく自分の真情を吐露したものと読み取れそうです。

⑨は六十年間、村祭りの踊りの輪に加わることもなく、どこへ行っても「よそ者」という扱いをされ孤独な生き方をしてきたと改めて我が身を振り返った句です。切ない思いがジーンと胸に伝わってくる句です。この句だけを見ていると一茶がやるせない人生を送りながらも純粋な感情を持ち続け子どもにも小動物にも優しい視線を注ぎ得た俳人というイメージが納得されてしまいます。そして、暗い境遇の中を生きてきたことの原点として必ず引き合いに出されるのは「まま子」であったという幼児体験です。

二

小林一茶、本名は小林弥太郎。一茶は一七六三(宝暦十三)年に信州柏原(現長野県上水内郡信濃町)で村の中では中農の家とされる小林弥五兵衛(三二歳)、母くに(年齢不詳)の長男として生まれています。三歳の夏、母親と死別し、その後、早く夫を失いながらも女手一つで弥五兵衛を育て家を守ってきたしつかり

者の祖母かなが一茶を大事に育てました。その様子を一茶は祖母三十三回忌にあたる年に書かれた祖母を追憶する文章では、

おのれ三歳の時、母の親は身まかりぬ。老婆不便がりて、むつきの汚らしきもいとはず、明け暮れ背に負ひ懐に抱きて、人に腰を曲げて乳をもらい、また首を下げて葉を乞いつつ育てけるに、竹の子の憂き節繁き世の中も知らず、づかづか伸びける。

(文化五・六年旬日記 文化五年七月九日)

と書いています。なんとすばらしい祖母でしょうか。おそらく一茶は祖母から亡き実母の姿を何度も聞かされ心にすり込まれたに違いありません。しかしながら、この文章には三歳の子のために祖母がその子を背に負って乳をもらうなど、祖母の行為を過大に表現しようという意図が読み取れます。

それはともあれ優しい祖母に育てられ「づかづか(どんどんと)」成長しても母なし子は孤独であり、

親のない子

「親のない子はどこでも知れる、爪をくわえて門に立つ」と子どもらに唄はるるも心細く、大かたの人まじわりもせずして、うちの畠に木・

萱(かき)など積みたる片陰にかがまりて、長の日をくらしぬ。我が身ながらも哀れなりけり。

我ときて遊べや親のない雀

六才 弥太郎

と哀しく切ないものだと感傷的に「おらが春」(二八・九(文政三年)の中で振り返っています。「親のない子はどこでも知れる、爪をくわえて門に立つ」は「親のない子はどこにいてもすぐにわかる。食べ物ももらえなくてひもじく爪をくわえて他家の門に立っている」という意味です。いやがうえにも親のない子の悲惨さが伝わってきます。

小さな共同体である柏原宿の子どもたちの集団からこのような陰湿なからかいを受け孤独感にさいなまれていたかどうか、よくわかりません。しかも六歳の弥太郎が詠んだとする句を添えているとなると、自分の悲惨な幼年期を誇張しようとするかなりの創作が入っているのではないか、という疑問も湧いてきます。そんな疑問が出てはきますが、一茶がその幼年期に母親がいなくて寂しい思いをしていたのは確かでしょう。

そして、一七七〇(明和七)年、三十八歳の弥五兵衛は二十七歳のさつを後妻に迎えます。一茶が八歳のときです。しつかり者でありパキパキとした性格の継母と暗いじめじめとした性格の一茶の二

人。水と油ほどに性格の違う二人が一つ屋根の下で暮らすのは無理がありました。当然ことながら二人の間にはトラブルが絶えません。祖母はそのあいだにたつて一茶をかばうこととなります。それは、

しかるに八才といふ時、後の母来たりぬ。その母(の)茨(いはら)のいらいらしき行迹(こうせき)行い、行状(こうじょう)、山おろしの激しき怒りをも、老婆袖となりて垣となりて助けましませばこそ、首に雪をいただく迄、露の命消え残りて、故郷の空の月をも見ぬ。

(文化五・六年旬日記 文化五年七月九日)

というものでした。継母による「継子いじめ」の始まりです。継母が容赦なく一茶を叱りつけ祖母がかばう。一茶は祖母の腕の中で実母への思いをよりいっそうかき立てる。そうしたことが続いて継母と一茶との不和は広がるばかりでした。そして、この不和は継母のさつが来て二年後に義弟の専六(後の小林弥兵衛)が生まれることでさらにひどくなりま

つています。
明和九年五月十日、後の母男子仙六(専六のこと)を生めり。この時信之(一茶のこと)は九歳になんなりけ

り。いたましいかな。この日より信之、弟仙六の抱き守に、春の暮れをそきもはこ(大便のこと)によだれに衣を絞り、秋の暮はやきにも、ばり(小便のこと)に肌のかわくときなかりき。仙六むずかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母に疑われ、杖の憂きめ当てるること、日に百度、月に八千度、ひととせ三百五十九日、目の腫れざる日もなかりし。たのみと思ふは老婆(祖母かなのこと)一人の助けとなり給ふに餓鬼の地蔵を見つけたるがごとく、あやふき難はのがれたり。

「父の終焉日記」(日記別記)

継母の命令で継母が生んだ弟や妹の面倒を見させられることは、継子にとって特別めずらしいことではありませんが、一茶にとつては継母への憎しみをさらに増大させる理由となりました。しかし、しつかりした祖母がそばで見ているのに「日に百度、月に八千度」も杖で殴られたとくれば、それは実際にあったとは考えられず、大げさすぎます。そもそも「日に百度」で「月に八千度」では計算が合いません。また、自分を信之などとして悲劇の主人公取りなのも気になります。「継子いじめ」の被害者という自画像を作り、自らがそれに酔っているように感じます。

そこへ祖母かなの死です。もはやかばう人のなくなつた弥太郎と継母との対立

はどうにもならなくなります。それを見ていた父親の弥五兵衛は一茶を江戸に行かせて継母と継子とを引き離すことを決断します。そのいきさつを「おらが春」で一茶は父に語らせています。

そもそも汝は三歳の時より母に後(おく)れ、やや長(たけ)なりにつけても、後の母(と)の仲むつまじからず、日々に魂を痛め、夜々に心火をもやし、一所にありなば、いつまでもかくありなん、一度故郷はなしたらば、あるいは、慕わしきこともやあるべきと、十四歳といふ春、はろばろの江戸へはおもふかせたりき。

「父の終焉日記」享和元年五月六日

「やや長なりにつけても」は「ようやく成長するにつけても」という意味であり「心火をもやし」は「激しい怒りや憎悪の感情をたぎらせる」という意味です。継母と一茶との対立がもはやどうにもならないと見た父親の決断で満十四歳の一茶は江戸へ奉公に出ました。以後、十年間ほど一茶の消息は不明となります。余談ながら、十四歳で信州柏原宿から江戸へ奉公に出ることは珍しいことではありませんでした。しかし、ちゃんとした百姓の長男を奉公に出すというのはいささか問題がありました。街道沿いに伝馬屋敷を構えて六石五升の田畑を持ち、

馬屋敷を構えて六石五升の田畑を持ち、

柏原宿の本百姓百三十八戸中四十七番目の中農で「血統正しき中産階級の百姓」とされた農家の長男を江戸に出すことは村の秩序を乱す恐れのある行為でした。しかも次男はまだ四歳です。父弥五兵衛の決断はかなりの覚悟の上であつたと思われま

三

以上、一茶の母なき子の孤独な幼少期、継母による「継子いじめ」のようすを一茶の残した「継母と継子」をモチーフにした「幼少期の回想録」から見てきました。理不尽なほどのいじめを受けたという一茶の思いから発する継母への激しい気持ちは父親の死後四十代以降に起きた遺産相続をめぐる継母と義弟との執拗ともいえる争いを通じていよいよ強くなつていったように感じられます。また、「江戸じまぬ昨日慕はし更衣(江戸になじまなかつた昔が懐かしい。江戸で更衣は何度もしたのに)」と三十年近く暮らしても江戸の暮らしにはなじめないと故郷にもどつてみれば肉親はもちろん村人からの視線も冷たい。ただし、あくまでも一茶からみればですが。そのあたりの句を何句か紹介します。

⑩ 雪の日や古郷(ふるさと)人もぶあしらひ
⑪ 心から信濃の雪に降られけり

⑫ 古郷やよるもさはるも茨の花

⑬ 古郷は蠅までが人をさしにけり

⑭ 人そしる会が立つなり冬籠もり

⑩の「ぶあしらひ」は「不あしらい」で「(故郷の人にも)冷たく対応された」という意味です。⑭の句の「人そしる会」は北国の長い冬籠もりの間、人の悪口を言うことで、それはストレス解消法でした。陰湿な方法ともいえるのですが、人の口に戸は立てられませんが、一茶は故郷に帰っても少しも気分がよくなかったことでしょう。こうまで自分が不幸になったのはすべて継子である自分をいじめた継母のせいだと考えるのも無理からぬことです。

この肉親との不和を和らげてくれ村人の間を取り持ってくれたのが五十一歳で嫁に迎えた二十八歳の菊でした。しかし、二人の間に生まれた三男一女はごく幼少で次々と死んでしまいます。菊もまた三十七歳で亡くなります。相次ぐ不幸は、その都度、「継母による継子いじめ」という心の原点ともいうべきところに一茶の心を引き戻します。六十年、俺には踊るような夜は一夜もなかった。俺の人生は光らぬ蛍だと、おのれの人生すべてに拡大していくこととなったのでしょうか。その思いがふっと出たのが次の句なのでしょう。

⑨ 六十年踊る夜もなく過ごしけり

最後に、繰り返しになりますが、一茶が描いた継母による継子いじめの一方的な被害者であるという自画像はあくまでも一茶自らが創造した小説的な偶像ではないか、という点はよく認識しておいた方がよいように思います。継母さつはしつかり者であり、同じくしつかり者であった祖母かなが同じ家に住むわけですから嫁対姑のいさかいがあつたに違いありません。その対立は祖母・一茶対継母・義弟専六という形になったであろうとは容易に想像ができます。「継子いじめ」の鬼と一茶から声が上がれば継母さつにはそれ相応の言い分があつたことでしょう。「我と来て遊べや親のない雀」という一茶の優しさあふれる表現の源泉が幼少期に受けた「継子いじめ」にこそあると即決するのは考えものようです。

最後に、繰り返しになりますが、一茶が描いた継母による継子いじめの一方的な被害者であるという自画像はあくまでも一茶自らが創造した小説的な偶像ではないか、という点はよく認識しておいた方がよいように思います。継母さつはしつかり者であり、同じくしつかり者であった祖母かなが同じ家に住むわけですから嫁対姑のいさかいがあつたに違いありません。その対立は祖母・一茶対継母・義弟専六という形になったであろうとは容易に想像ができます。「継子いじめ」の鬼と一茶から声が上がれば継母さつにはそれ相応の言い分があつたことでしょう。「我と来て遊べや親のない雀」という一茶の優しさあふれる表現の源泉が幼少期に受けた「継子いじめ」にこそあると即決するのは考えものようです。

隠された歴史(51)

満田 正賢

今回より日本書紀と続日本紀に記された「聖地」について考察します。この考察にあたっては、「聖地」を「ある特定の存在が『神』として崇められ、特定の場

所に祀られ、参拝の対象となっている地域」と定義付けします。

最初に伊勢神宮を考察します。現代の皇室は伊勢神宮を聖地として崇め、天皇即位の礼においては勅使が伊勢神宮だけに遣わされます。伊勢神宮に関しては、齋王制度の背景、各儀式の成り立ちなど多くの研究課題がありますが、ここでは、本位田菊士氏の考察を参考にしながら、近畿王朝が伊勢神宮を聖地とした経緯に焦点を絞り、近畿王朝がいつ伊勢神宮を聖地として崇めるようになったのかを考察します。

まず、伊勢神宮に関する記紀の記述を紹介します。伊勢神宮の成立経緯については、古事記では崇神記に娘の豊鋸入比賣(とよすきいりひめ)命に伊勢大神を祭らせた」と記しています。一方、日本書紀では、崇神紀に、崇神が天皇の大殿の内(※垂仁紀では磯城の祠)に祀った天照大神を、垂仁が異母妹の豊鋸入姫命から離し、娘の倭姫命に天照大神を祀るべき場所を探させ、大神の教えのままに伊勢に祠を立て齋宮を創建した」と記しています。

記紀は、神武から開化までは大和の磯城地方の一豪族にすぎなかった古代近畿王朝が、崇神の代に近畿一円に勢力範囲を拡大したと記しています。近畿一円に勢力を広げた古代近畿王朝の勢力が東の海から日が昇る伊勢湾にたどり着いて、そこに神秘性を見いだしたということであ

れば、特に不自然なものではありません。なお、古事記は倭姫命が天照大神を祀るべき場所を探したという説話を載せておらず、又、伊勢大神という名称を用いているので、初期の伊勢大神はアマテラス神話と結びついていなかった可能性もあります。

次に倭建命(日本武尊)の逸話です。記紀に共通して、垂仁の次の景行段には倭建命(日本武尊)が東国制圧に出發する際に、伊勢神宮に立ち寄って姨の倭姫命から草薙剣を授かったという逸話が載っています。倭建命の逸話は、古代近畿王朝が日本各地を制圧した際の複数の人物の逸話を寄せ集めて、倭建命という一人の人物の英雄譚に仕立て上げたものと解釈できます。古事記にはなく日本書紀のみに載っている景行の九州征制譚は、古田武彦氏が「盗まれた神話」で、九州王朝の史書から盗まれたものであると洞察しています。日本書紀に於いて景行の九州征制譚と日本武尊の熊襲征伐の逸話は重複しています。二つの逸話の重複を考えると、日本武尊の熊襲征伐の逸話は古代近畿王朝に残っていた逸話であった可能性が高いと考えますが、その逸話の中に倭姫命と草薙剣の逸話が含まれていたかどうかについては検討を要します。

次に記紀神話の中の伊勢神宮の記述についてです。古事記には瓊瓊杵尊・天孫降臨の項に、「この二柱の神は、拆く釧(さ

くくしる) (口の割れた腕輪) 五十鈴(いすず)の宮(伊勢神宮内宮)に祀つてある。次に登由宇氣(トユウケ)神、これは外宮の度相(わたらい)に鎮座する神である。」(岩波版古事記) という記述があります。この記述の内容は伊勢神宮と一致しますが、天孫降臨の記事の中で、前後との脈絡もなく唐突に出てくる記述です。古事記の天孫降臨の場所は「筑紫の日向の高千穂の櫛觸(くしふる)峯」です。崇神記に伊勢大神と五十鈴宮との関連が記されていないことから、この記述は、天孫降臨の神話の中にあとで差し込まれたものである可能性が高いと思われます。

日本書紀には、神代紀上に伊勢神宮が出てきますが、これは「一書曰」として付け加えられた中臣氏の祖先に関する逸話の中の記述です。神代紀下・瓊瓊杵尊・天孫降臨の項には「アメノウズメはもどつてきて事情を報告した。皇孫はそこで天の磐座を離脱して、天の八重の雲をおしわけて、聖なる道をえらびわけては、天降った。はたして先の(ハルタヒコ)の予期したとおり、皇孫は筑紫の日向の高千穂の櫛觸峯に着いた。そのサルタヒコ神は伊勢の狭長田(さなだ)の五十鈴川のほとりに着いた。」(現代語訳日本書紀・山田宗睦訳)という記述があります。

この日本書紀の記述は、古事記の記述を脚色したものと考えられます。日本書紀の記述においては、「筑紫の日向の高千穂

の櫛觸峯に着いた」という天孫降臨神話の伝承の中に「サルタヒコが伊勢の五十鈴川のほとりに着いた」という全く離れた場所でのサルタヒコの伝承が潜り込んでいることとなります。

次に伊勢神祠への皇女の派遣記事についてです。古事記では、伊勢神祠への皇女の派遣記事が崇神記、垂仁記、継体記に出てきます。継体記以降については伊勢神祠への皇女派遣記事はありませんが、古事記には仁賢以降のトピックスが記載されていないので皇女派遣の有無はわかりません。しかし、少なくとも継体記までは伊勢神祠が古代近畿天皇家の聖地であったと記されています。一方日本書紀では、伊勢神祠への皇女の派遣記事は、垂仁紀、仁徳紀、雄略紀、継体紀、欽明紀、敏達紀、用明紀、天武紀に出てきます。欽明紀、敏達紀、用明紀の皇女派遣記事は古事記にはなく、日本書紀が創作した可能性もあります。しかしここで重要なのは、推古の時代から天智期まで伊勢神宮への皇女派遣が記されていないことです。

ここで話を改めて、「伊勢神宮と古代日本」(本位田菊土著・同成社)の中の興味深い考察を紹介します。概要は次のようなものです。

①古墳時代中・後期・伊勢神祠の主神は大和から伊勢に移った日神(ヤマトヒメ巡行の伝説)と継体大和入りにとも

なう、日本海域の月神系神祀体系の輸入(丹波からの豊受神選祀の伝承)が交錯し、一時的に日月神並祀の環境が生じたが、斎王(女)の選任はヤマト系と北方系が交替している。在地神昇格により皇室の氏神と化したとする一説は考えられず、内外宮の主神は中央と在地勢力との支配被支配関係をそのまま反映したものであり、在地勢力はこの段階までにほぼ壊滅した。

②飛鳥時代・蘇我氏の台頭と後期ミヤケ制の推進により、伊勢にも新家屯倉を中核とする先駆的な水田耕作が導入され、稲作文化を背景とする日神崇拜がいつそう強化される。敏達期の東国を中心とする日祀部の設置はそうした背景によるが、斎王(女)の酢香手姫皇女(ヤマト・蘇我系)が三代にわたって日神に奉祀したと伝え、そこにはじめて「伊勢神宮」の名が現れる。

さきの天照大神遷祀の伝説(ヤマトヒメ巡行伝説)に皇太神宮儀式帳のみが伝える「百張(ももはり)蘇我国」の記載があり、この時期の伊勢神宮を推察するうえで重要なキーワードとなる。おそらく斎宮の設けられた多気地方の古名であろうが、新家屯倉を配下に置いた蘇我氏が伊勢の経営に乗り出した証となると思われる。ところが、舒明期以降ふたたび近江系の皇親関係が復活し、大化改新(六四五年)を通じて、蘇我氏の本宗を祠堂から駆除す

る。その影響であろうか、斎王(女)は天武朝まで五代にわたって中絶(太神宮諸雜事記一代要記)する。

③天武・持統朝・壬申の乱を契機として、天照大神が出現する。斎王(女)制は大来皇女の登場により復活し、斎王は天照大神の分身ともいえる「巫女王」にふさわしい権力を発揮する。だが、大津皇子の「謀反」が動機とみられる律令制下の皇極による統制が行なわれ、式年遷宮の採用と新たな斎王制の編成により、文字どおりの伊勢神宮の再編が完結する。

④「斎宮」の語は、伊勢神宮(神祠)の創祀当初から用いられたものではない。のちの天武朝までの神宮は一般に祠と表記されており、この場合の斎宮は斎王すなわち倭姫命の斎き祀るところとしての斎宮を称したにすぎない。伊勢神宮の語にしても、景行紀四十年十月条に、日本武尊東征にあたって「伊勢神宮」に参拝したとあること、同王十一年条に、同尊が蝦夷を献上する伝承中に神宮の名がみえ、崇神記にも「豊鉏入比賣、伊勢大神の宮を拝き祭りき」などがある。景行記の倭健命が詔により出征した途次、伊勢神宮に詣り姨の倭比売命から草那芸剣を授与された。景行記には神宮を「神の朝廷」と注記しているの、一定時期にはすでに公的施設の認識があり、天皇の宮と同様に受け取られたことを示している。記

紀景行段以後伊勢神宮の名は継体朝まで見えず、息長真手王の女、麻組郎女（おくみのいらつめ）の生む、佐々宜郎女（ささぎのいらつめ）について「伊勢神宮を拝きたまひき」（継体記）とみえる。書紀より件数は少ないが、すべて神宮の名で統一し、時代の変化に添ずることなく、編纂の色彩が強い。

⑤垂仁紀の伝承を除けば、記紀を通じて「齋宮」の名が現れるのは、この天武紀以外皆無であった。

⑥伝説的で作爲が認められる垂仁、景行段に伊勢神宮、天照大神の名が記され、これが天武紀以降に再度登場するのは、従来から指摘されているとはいへ、天照大神出現の契機が何時かを予測されるものがある。

⑦畿内圏の枠外、一定の距離を保つ、その東端に伊勢神宮が存することの意義は軽視できない。なぜなら従わぬ蝦夷が支配するという東国に対し、伊勢はその起点となる境界、障壁というべき位置を占めていた。

⑧神宮を呼称する建造物についてはどうか。まず石上神宮を取上げたい。天武紀三年八月戊寅朔庚辰条に忍壁皇子を遣わし膏油をもって神宝を瑩（みが）かしめ、同時に神府に貯めた宝物をいま皆その子孫に返還せよと命じている。石上神宮はその確かな事例であると同時に神宮の呼称がこれ以降消滅することにも注目しなければならぬ。神宮

は神府、神倉と対応する点を見のがすべきではなからう。本来所屬する諸家の神宝を返却するというのは神府を解体して一般の社（祠）に降格させる狙いがあり、神宮の名義を考える際看過できない要素と考える。この前後は壬申紀に天照大神が出現し、同三、四年紀には大来皇子、十市皇子が伊勢神宮に参向しており、石上神宮の神府解体は、国家祭祀の中枢を伊勢神宮に移管させようとする布石ではなからうか。

ここからは私の考察です。本位田氏の考察で特に注目したのは、「古事記は」書紀より件数は少ないが、すべて神宮の名で統一し、時代の変化に添ずることなく、編纂の色彩が強い。」という指摘と、「皇太神宮儀式帳のみが伝える『百張蘇我我馬子』の記載があり、この時期の伊勢神宮を推察するうえで重要なキーワードとなる。」という指摘です。

まず古事記の編纂は誰が行なったのかという点を明らかにする必要があります。私は、古事記は推古記で終わっていることから、蘇我馬子が編纂した天皇記・国記のリメイク版であると考えてきました。蘇我馬子は後期九州王朝（筑紫天皇家）に対抗して、大和にいる欽明く推古の正統性を知らしめる目的で天皇記・国記を編纂したと考えられます。そして蘇我馬子は古代近畿王朝に伝わっていた天孫降臨伝承・神武伝承に、当時蘇我氏の勢力下にあった伊勢祠を結びつけ、歴史の創

作をしたと考えられます。日本書紀は天皇記・国記にさらに粉飾を加えたことがうかがわれます。ヤマトヒメ巡行伝説は日本書紀の創作であり、さらに鎌倉時代に成立した倭姫命世記は、本来的には別の逸話をヤマトヒメ巡行伝説にあてはめた書物であると考えます。

日本を支配してきた王朝の聖地について、私は、倭の五王から磐井まで続く前期九州王朝の聖地は高良大社であろうと考えています。又、継体が磐井の乱によって前期九州王朝を倒した後、宣化の嫡子が那津官家に移って創建した後期九州王朝は、継体の五世祖である応神天皇とその母である神功皇后の伝説を神話として掲げ、最終的に応神が化身した八幡神を祭る宇佐八幡宮を聖地として位置づけたと考えています。これらの点については次回説明する予定です。

一方で、蘇我馬子は欽明が近畿王朝の正当な後継者であるという立場で歴史を創作したと考えます。蘇我氏と欽明王朝家にとっては伊勢神祠を古代近畿王朝から続く聖地として位置づけ、宇佐八幡宮に対抗する必要がありました。

本位田菊士氏は「舒明期以降ふたたび近江系の皇親関係が復活し、大化改新（六）

四五年）を通じて、蘇我氏の本宗を朝堂から駆除する。その影響であろうか、齋王（女）は天武朝まで五代にわたって中絶（太神宮諸雜事記一代要記）する。」と

捉えています。私は、蘇我本宗滅亡以降は、後期九州王朝が前期難波宮を都として建設し、倭国王朝として名実共に日本全体を支配していた時期にあたると考えています。

天武が伊勢神宮への齋宮派遣を復活させたことは間違い無いと思われませんが、天武期における国家祭祀の中枢としての伊勢神宮の確立は、天智期まで後期九州王朝の聖地となっていた宇佐八幡宮への崇拜に対し、天武が古代近畿王朝の聖地を復活させ、後期九州王朝から近畿王朝への崇拜の対象の転換を図ったものではないでしょうか。



「女芭蕉の心意気」

桑原久子の旅日記から(三)

船は広島県竹原市の東南、長浜に着きます。ここでまた風待ち二、三日。

久子さんは「こりやー徒然(とじ)ねえ」(たいくつ、手持ぶさた)と、「長浜から陸へあがるごとしまつしようや、途中、よりより見たいところもあるし」と言い出します。宅子さんら三人は、歩くのは嫌で、船組になり、二手に分かれます。久子さんは船酔いにも恐れをなしていたらしく、にこにここと供の男一人を連れて船を下りていきます。宅子さんは「いずれ丸亀で落ち合いましょう」と久子さんに手を振ります。久子さんは、三原、尾道、鞆の浦の辺りは陸路、従者一人を連れてですが、単独行動をしているのです。「和して同ぜず」の悠々たる人間的車間距離です。オトナの女の器量というべきか、あるいは商業視察、景気の探訪など商用でもあったのか。

(金毘羅)

「こんぴら船々 追風(おいて)に帆

かけて シュラシュシュ シュ まわれれば 四国は 讃州 那珂の郡 象頭山(ぞうずさん) 金毘羅大権現 一度まわれれば」と民謡に歌われ親しまれる金毘羅(こんぴら)さんです。この歌は江戸末期から歌われ始めました。

祈る人あればありそのうきふねの うきをたすく神の尊さ 久子 (現代語訳：祈る人があるなら、その浮舟の浮きを助けてくれる神の尊さよ)

金毘羅さんは、象頭山の中腹に位置し、参道の石段は七八五段(標高二五一メートル)、奥社まで登ると一三六八段(標高四二一メートル)になり、その真上にあたる琴平山頂上は標高五二四メートルです。

七八五段の名物階段を登ったところが本宮です。本宮からの眺めも良いです。書院では丸山応挙の襖絵も楽しめます。

金毘羅さんは狛犬の宝庫でもあります。青銅のものから、かわいい神殿狛犬、立派な備前焼のもの、鳥取や島根に見られるお尻を上げた形のものなどがあります。明治初年の神仏分離以前は金毘羅大権現と称し、通称は「讃岐(さぬき)の金毘羅さん」で知られます。当初はあらゆる分野の人々に信仰されましたが、一九世紀以降は特に海上交通の守り神として信仰されていました。

権現とは何でしょうか？ 釈迦や菩薩が人々を救うために、権(かり)に日本の神の姿となって現れたとする考えです。その権現を信仰するのが権現信仰です。春日、日光山、熊野など、主として山岳信仰の神社が権現と称しました。

日本固有の「八百万(やおよろず)の神」(数多くの神々)の信仰と仏教信仰が融合調和した、神仏習合思想は、奈良時代頃に起こり、明治初年の神仏分離令まで一〇〇〇年以上続いていました。権現信仰は、仏が仮に神の姿で現れ、民衆を教化すると考える本地垂迹説の元になりました。本地垂迹説とは、平安時代にあらわれた、仏を本地仏、神を垂迹神とする仏主神従の思想です。大日如来と天照大神、阿弥陀如来と八幡神などがその例です。

江戸中期に入ると「金毘羅詣り」が盛んに行われるようになり、伊勢神宮へのお陰参りに次ぐ庶民のあこがれだったと言われます。

明治元年(一八六八年)、明治政府は神仏分離令を出します。第一九代金光院別当であった、琴陵宥常(ことおかひろつね)は、神仏混淆であった「象頭山金毘羅大権現」を「琴平山金毘羅宮」と改称し大物主を主祭神とする神社としました。その際に、多くの仏教経巻仏具などが売却または焼却されました。

金毘羅信仰を後世に伝えようと、一九六九年(昭和四四年)宗教法人金毘羅本

教の設立認可を受け、金毘羅本教の総本宮となりました。総本部は金毘羅宮の大門口近くにあり、二〇二〇年には金毘羅本宮は神社本庁に対して「被包括関係を廃止する」との通知を送付し、神社本庁からの離脱が承認され、単立の神社となりました。

奥社へ登る途中に北原白秋の立派な歌碑があります。

「守れ権現夜明けよ霧よ山はいのちのみそぎ場所」です。

慶應山岳会の「山の唄」の歌詞冒頭です。

私は、なぜ大権現のままではいけないのか、一〇〇〇年以上も続いた神仏習合思想を、明治政府は一片の神仏分離令で否定しなければならなかったのか、と問ひかける歌詞のように、北原白秋の意図はわかりませんが、この歌碑から感じ取りました。

一三六八段の階段を登り切った先には厳魂(いつたま)神社(奥社)が鎮座しています。戦国時代に、荒廃した金毘羅大権現を再建した宥盛を明治になって厳魂彦命として祀っています。宥盛は死の直前には神体を守るために天狗に身を変えたとの伝説があります。

(善通寺)

善通寺は、香川県善通寺市にある、真言宗の寺院です。本尊は薬師如来です。和歌山県の高野山、京都府の東寺とも

に弘法大師（空海）三大霊場に数えられます。

平安時代初頭の八〇七年に真言宗開祖空海の父である佐伯田公（たきみ）（普通（よしみち））を開基として創建されました。広大な境内は創建地である東院（伽藍）と、空海生誕地とされる西院（誕生院）に分かれています。

寺号の普通寺は、父の名前である佐伯普通から採られ、山号の五岳山は、香色山（こうじきさん）、筆山（ひつざん）、我拝師山（がはいしざん）、中山（ちゅうざん）、火上山（かじょうざん）の五つの山の麓にあることから命名されました。

香色山は、普通寺から見える裏山で標高一五三・二メートルのお椀を伏せたようなきれいな山です。山頂には、佐伯直遠祖の神と刻んだ石廟や不動明王、愛染明王の石像があります。また、弥生時代の石棺墓や平安時代の経塚が発掘されています。

空海は讃岐国、現在の香川県普通寺市の出身です。

西院には空海が生まれた屋敷の跡に建つというお堂があります。御影堂には親鸞聖人手彫りの親鸞像があります。拝観料も監視もなくおおらかなことです。親鸞が布教で滞在していた福島県の豪農が上人の言葉を守り、ようやく三代目のお孫さんからここへ送られた像だと言います。つまり、親鸞が自分は今もう法然師匠ゆかりの普通寺へ行けないから代わりに

像を託したのです。

東院と西院の間には、中国電力、百十四銀行が一〇〇万円、セシル創業者が一五〇〇万円など高額寄付が行われており、東京の中国名の個人からは億単位の寄付まであります。

隆盛を極め、お金も集まってくるお寺だとわかります。

東院は薬師如来を本尊とする本堂と空海の両親の霊廟、五重塔などがあります。空海は、この地帯を広く治めていた佐伯という豪族の三男として生まれたと言います。両親の本当の霊廟は山の上にあります。

（丸亀城）

丸亀城は、切り立った石垣が有名です。標高六六メートルの亀山山頂に見える三層の小さな白亜の天守は美しいです。丸亀城の天守閣は再建されていない、全国に一二しか残っていない木造天守閣の一つで、高さ一五メートルと日本一小さいものです。晴天の時には、三の丸から佐貫富士が綺麗に見えます。

二月一日、宅子さん達が丸亀の町をそぞろ歩いていると、旅姿で急いでくる久子さんとそのお供に、ぼったり道で逢います。宅子さんは涙ぐんでしまいます。

「分れ路はことほり（道理）なれど
めぐり逢ふ 時にも袖のぬれにけ

るかな

宅子

よう。

女旅の一行は、再びフルメンバーとなつて船旅を続けます。

久子さんの『二荒詣日記』によれば、二月八日、児島から「わがさとの大黒丸なにがしの船に乗りて播磨の国高砂ノ浦をさしてゆく」とあります。つまり、筑前の船が備前の湊へ来ていたので、それに乗ったということです。

明けて一九日、風が荒くて、船が播磨の国の赤穂の浜に着いたのを潮（うしほ）に、船を捨て、ここから陸行することになります。

プロパガンダに騙されるな ―学び直そう戦争と憲法の歴史（十）―

成瀬 和之

日露戦争の宣戦の詔勅で明治天皇はこう言いました。「ロシアは満州を併呑しようとしている。もしロシアが満州を領有すると韓国を保全できない。極東の平和もない。韓国の安全は危急に瀕し日本の利益が侵される。だから韓国の安全、東洋永遠の平和のためにロシアと戦う」と。

「台湾有事」に備えて大軍拡につき進む今日、日露戦争についても学び直しまし

日露戦争では、大日本帝国が戦う相手はロシアです。ですから、ロシアに日本の意図を知られることをいかに防ぐかそのことにもつぱら努力します。一方、戦場となる韓国に対しては、日本軍はあからさまに韓国の主権を侵害することもさして意にとめず、隠密ではあるが大胆に韓国の主権を踏みにじって、ロシアとの戦争の準備を進めました。日露戦争の実態については、二一世紀に入って、日本での研究は画期的に前進しました。ここでは、和田春樹さんの『日露戦争』上・下（岩波書店、二〇〇九年、二〇一〇年）、在日韓国人研究者である金文子さんの『日露戦争と大韓帝国』（高文研、二〇一四年）から二つのことだけ紹介します。

一つは、日露戦争はいつ・どこで始まったのか、ということ。

日本で刊行されている書籍では、日本海軍が韓国の仁川沖でロシア艦隊を攻撃して日露戦争が始まったと書いているのが普通です。一九〇四年「二月八日」のことです。

しかし、その二日前、二月六日、韓国の鎮海湾を日本の連合艦隊の根拠地にするために占領しました。

日清戦争が清国の海軍と交戦する二日前、日本軍による朝鮮の王宮占領から始まったことは前回書きましたが、日露戦争の時も二日前、大日本帝国は韓国の領土を占領することから始めたのです。

金さんの研究では、日露開戦の二〇日
以上も前、一九〇四年一月十五日、日本
海軍は、国際法を無視して、佐世保から
韓国領海内、全羅南道の珍島北西「宝島」
まで海底電線を敷設していたのです。

日露戦争を指導した海軍大臣の山本権
兵衛は、一九〇四年一月三十一日、「千代田」
という軍艦の艦長に訓示を送りますが、
「韓国の沿岸では、他の列強との間にい
ざこざを引き起こさない限り、国際公法
のきまりを重視する必要はない。国際公
法にこだわらず行動してもよろしい」打
電しています。

日露戦争も、江華島事件（一八七五年）
日清戦争（一八九四〜九五）に続いて、
大日本帝国は、朝鮮、大韓帝国の国家主
権を踏みにじって行われたことを、私た
ちは忘れてはなりません。

もう一つ紹介したいのは「竹島」の問
題です。

現在、日本政府は「竹島は日本固有の
領土である」と言っています。

竹島は、日露戦争のときどんな役割を
果たしたのでしょうか？

一九〇五年五月二十七日、ロシアのバル
チック艦隊は対馬海峡で日本の連合艦隊
に迎撃され、壊滅的な打撃を受けました。
しかし、全滅したわけではありません。
逃れた艦船もあったのです。その残存艦
船を、日本の連合艦隊の主力はウラジオ
ストクへの航路にあたる「竹島近海」で
待ち伏せします。

その結果、ロシアのバルチック艦隊の
残存艦隊はここで日本の連合艦隊に捕捉
され、戦わずして降伏し、バルチック艦
隊は全滅したのです。五月二十八日のこと
です。日本の連合艦隊司令長官東郷平八
郎が、大本営に勝利の電報を打ちました。
この電報で「竹島」のことを「リヤンコ
ールド岩」と書いているのです。

この電報は翌日、大本営に届き、『官報』
にも新聞にも、そのまま掲載されました。
ところが、八日後の六月五日の『官報』
に、「リヤンコールド岩」を「竹島」に訂
正するというのです。

「リヤンコールド岩」という島名は、
一八四九年、フランスの捕鯨船、リヤン
コールド号が初めて発見したとしてこの
船にちなんでつけられた名前です。

実は、「リヤンコールド岩」と呼ばれて
いたこの岩礁について、「竹島」という名
前で、日本海海戦の四カ月前、一九〇五
年一月二十八日、日本政府は閣議で日本領
に編入することを決めていたのです。

ところが、この閣議決定による「竹島」
という新たな島名を、東郷平八郎をはじめ
日本海海戦の勝利の電報を起草した参
謀も、受け取った大本営も、そして新聞
社も知らなかったのです。

今日、日本政府は「竹島」は島根県に
属する日本固有の領土だ、と学校教育で
教え込んでいますが、この「竹島」を「日
本領土」だと日本政府が決定したのは、
一九〇五年一月二十八日、すなわち日露戦

争の最中、ロシアのバルチック艦隊を迎
え撃つ、その軍事的必要と結びついて閣
議決定されたものだったのです。

「竹島は日本固有の領土だ」というな
ら、日露戦争当時、日本の連合艦隊の最
高司令官、大本営、新聞も、その「固有
の領土」の地名を知らなかったという不
思議をどう説明するのでしょうか？

詳しくは、『日本と韓国・朝鮮の歴史』
（増補改訂版、高文研、中塚明著、二〇
二二年八月）を参照してください。

アメリカはベトナム戦争の敗色が濃厚
となる中、自らは後ろに引き、「アジア人
をアジア人と戦わせる」構想を練ってい
たの思い出します。実際に韓国軍をベ
トナム戦争に投入し、手足として使いま
した。

北朝鮮やロシアを利用して危機をあお
り、「台湾有事」、「敵地攻撃能力」が叫ば
れ、「外交なき大軍拡」が進展している現
在、NHKなどの「大本営発表」、戦争プ
ロパガンダに騙されず、歴史の教訓に学
ぶことが、今こそ求められているのでは
ないでしょうか？

「過去は現在の光に照らされて初めて
知覚できるようになり、現在は過去の光
に照らされて初めて十分に理解できるよ
うになるのです。」E. H. カールの名著『歴
史とは何か』の新訳、新版（岩波書店、
近藤和彦訳）が、今年五月に出ています。

俳句

土田 裕

積読の一書抜き出し読み始め
年々に石段の急初詣
初夢や誰も話さず聞きもせず
寒雲の割れて天より初明り
良き独楽は沈黙考回りけり

影山 武司

そのときを鼓動の刻む初日の出
柴犬の朱きスカーフ年新た
福寿草前菜はみな縁起物
足音の揃ふ親子や走り初め
張る糸に空の手応へいかのぼり
常連の揃ふ日だまりちやんちやんこ
ミステリーの謎解けぬまま玉子酒
北風鳶のズボンのためきて
鉄橋の音の間遠に枯野かな
冬天へ凜と真白き剣が峰

◇ 十六ページからの続きです。

颯爽と署名をさけるパンタロン

ししゅう針女一途の夢を刺す

握りかえず掌に温もりのない女

肉親に飢えてべたべた座るくせ

夢二画く曇りガラスに似た女

男運だけが女を丸くする

下取りのきかぬ女の人情味

飲まぬ男を飢えた女がうばいあう

よく喋る女に欲しいONとOFF

一日の維持費の高い女です

自炊して愛には縁のない女

妻と一度は呼んだ女もまだひとり

お仕合わせ昔の女から聞かれ

女の敵はおんなみごとに騙される

翔びすぎた女それ見る羽根が折れ

雑役におしい女のヘルメット

女来て男の部屋を開け放つ

美しき焼香のひとみな知らず

嬌声をあげて女に年はなし

度し難く愛しきものの名は女

善人と分かる女のいい素顔

襟あしのあたり堅気になれぬひと

手鏡へ女の絆としがらみと

虚勢はる女崩れる場所がなし

女手に六三三が長かった

母子寮へ女を捨てた訳でなし

雨女男の軒を借りにくる

子も産んだ一人前の女です

クンづけで女にハッパかけられる

この壁の向こうは女昼を寝る

先鞭はドラマ女の平手打ち

ふりかかる火の粉払わず火の女

騙されてから大胆になる女

どこか少女を残す女が無理をいう

男を詠んだ句に比べて、そんな女でい

いのかと尻を叩くような句がない。今か

ら六十年から四十年前の、主に男の目が

とらえた女の句である。次の二十年、そ

してこの二十年で男の句も女の句もすつ

かり変わったはずである。そのことにつ

いてはまた触れることにする。

編集後記

S K 生

▼中国語で「ゼロコロナ」は「動態清零」

というそうだ。「動態」は「動き」であり、

「清零」は「ゼロに清める」という意味

である。「清零」という言葉には「とこと

んゼロにする」という当局の意志が反映

されているという。ところが、最近、こ

の「ゼロコロナ」政策が大幅に緩和され

た。この政策転換の背景に十一月末に各

地で広がった「ゼロコロナ」政策への激

しい抗議活動があったのは間違いない。

学生や市民たちが白い紙をシンボリックに

掲げた「白紙運動」の光景は記憶に新し

い。この「白紙運動」の先頭を切ったの

は南京メデア学院の学生たちだったと

いう話を先日知った。その彼らが運動の

さなかに作り歌った歌曲が「如果你不

愿走在前面(もしもあなたが先頭に立ち

たくないなら)」である。▼歌は「如果你

不愿走在前面」から始まる。長い引用に

なるが、日本語訳で示す。

もしもあなたが先頭に立ちたくないな

ら

どうか隊列の後についてください。

もしも隊列の後についてきたくないな

ら

どうか路上で眺めていてください。

もしも路上で眺めていたくないなら

ネットで叫びを上げてください。

ネットで叫ぶのが嫌なら

どうか黙って目を閉じて腰を下ろして

私たちがあなたのために勝ち取った権

利を享受してください。

でも、見て見ぬ振りはいしないで下さい。

まして、あざ笑ったり罵ったりはしな

いでください。

勝ち取られた陽光は私のものであり、

あなたのものでもあるから

た。

▼多くの民衆に呼びかけた優しい配慮に

あふれた歌である。この歌には「〇〇の

前衛」といった気負いはまったく感じら

れない。歌は軽快なポップス調だそうで、

多くの学生と市民がこの歌を歌い活動に

参加したことであろう。その行動は心配

顔で隣国の様子を見ている我々にとって

の希望であった。すべての人の自由を求

め一人一人の人間の尊厳が尊重されるこ

とを望む声は専制主義の国の民衆にあつ

ても心の底に強くあるものだという当た

り前ことを再認識させられる。▼しかし、

聞くところによると抗議活動は当局から

外国勢力の先導によるものだとい決めつけ

られ、運動の最初の担い手であった勇氣

ある女子学生は十一月三十日に当局に拘

束され、いまだに行方不明だという。町

中に監視カメラが張り巡らされ顔写真一

枚あればその人物が中国のどこにいるの

か数秒ではじき出せるという中国で抗議

活動を始めようとすれば先ほどの歌の内

容に見られる優しさは必要だったのであ

ろう。▼新年を迎えたメデアでは目を

覆うばかりの日本の国力の低下・衰退を

憂うる声が相次いだ。貧すれば鈍す、で

ある。日本の民主主義の危機が叫ばれて

久しい。あらゆる所に設置された監視カ

メラの下での民主主義。ぞっとする。そ

んなことを思いつつ正月三が日を過こし

た。

謹賀新年、男の句

謹賀新年、取り急ぎめでたく年が明けたもののこの一年がめでたい年で終わるか、見通せない。二〇二三年を男どもはどう生きるか、我が身を振り返りながら男の句にはどんなものがあるか、そこにヒントはないかなどと思つた。断わっておくが取り上げるのは、「男」が何の疑問もなく川柳の課題になつていた時代の句である。先ずは、一九六三年一月から一九八一年八月までの『川柳番傘』誌に掲載された句からの抜粋である(番傘川柳本社、『続・類題別 番傘川柳一万句集』創元社、一九八三年)。

忍耐へ男はいつか慣らされる
埋もれ火のような男がしたわれる
昼休みのアリバイがない男たち
口下手な男のペンに嘘はない
永遠の夢へ男は砂金掘る
粗野になる男の底が見えてくる
笹舟の視野に男は出て来ない
男ならついて来いとはなぜ言われぬ
掃除機にテレビ追われた粗大ゴミ
すつからかんに成つて男が磨かれる

ついて来いそんな自信がいつ持つて
鞭の先で躍るその名は男かも
結論を出せば男へ流れ弾

三塁でいつもアウトになる男
煮えきらぬ男に渡す走り書き
男気を出して帰つて家でもめ
思い出が多い男に明日がない
みじん切りにされて男が黙り込む
裏側も見せて男のよい器量
酒注いで男ごころの裏を読む
定年のまだまだ男のにおいする
口髭をはやし男にある転機
しょつきりがうまい男で出世せず
ローションの飛沫の中に火の男
一婦制疲れの覚えてきたおとこ
いきいきと男に夜のプログラム
生きたゼニ使う男の数も減り
爪噛んでいた男から異議が出る
弁解をする男が小さくなる
それ以上言うと男が軽くなる
出る杭になるなと妻の顔浮かぶ
味方には海の匂いのする男
波に乗る男に蹉跌きつと来る
好きでない男が力貸すという
男くさい部屋だわ窓をあけてあげ
京訛り男がいえば味が無い
足跡のひとつ男になつてゆく

凍るもの凍れひとり男住む
生きていくだけで妻には杖となる
官報のような男と嫌がられ

使いたくても生きたゼニはなく、つ
いて来いという自信もないまま掃除機
に追われる粗大ゴミとなり、官報のよ
うに嫌がられ、爪を噛み噛み異議を唱
えても三塁でいつもアウトになる男は、
凍るものは勝手に凍れというほかない
のか。と、嘆きながら、いやいや、
男とはそういうものではあるけれども、
こんな男のままではいはずがないと自
らを叱咤している句なのかもしれない
と思ひ始めた。いや、きつとそうだ、
そうに決まっている。
では、この時代に「女」はどう詠ま
れていたか。

ボタンつけてくれる女のいい匂い
老いてなお女は花にたとえられ
夢二の絵女かかくもやさしかり
女とはあとを待たしてゆずりあい
よく喋る女ですぐにだまされる
母老いて女のいくさまだ続く
色気など嫌いなようにいう色気
実権を握ると女らしくなり
ささやかな奢り女の食べ歩き

花咲けば咲いたで女とび回り
いつからか金の匂いのするおんな
惚れすぎて男を駄目にする女
妻の客僕なら五秒ですむ話
生きがいを秘めて女が乳房もつ

電話ボックス赤いドレスの水の中花
おしゃべりも女多忙のうちに入れ
背を向けたままで女は老けてゆく
賑やかに女そろろうて道狭し
続篇も続々篇もある女
爪染めるほかに取り柄のない女
軽い絆で軽いおんなの蜃気楼
手に何か提げぬと女たよりなし
無色無臭そんな女とおぼし召せ
赤裸々に書いて女になつてゆく
罪深き女で次の世も女

女から好きと言わせた憎い人
飼育して口笛を吹く女かな
母を語る母におんなの業をきく
B面の女に温い風が吹く
逃げ水の彼方に佇っている女
能面のような女とフルコース
しきたりへ素直に溶けて京育ち
火と燃える女に倫理邪魔になる
目いっぱい生きた女の吐息聞く

◇ 続きは十五ページにあります。